

江戸川乱歩の世界
① 人間椅子

目次

江戸川乱歩の世界

人間椅子

- 一、 一通の手紙
- 二、 妄想の世界
- 三、 人間椅子の完成
- 四、 奇つ怪な快樂
- 五、 新しい経験
- 六、 新たな展開
- 七、 奥様の反応
- 八、 更なる妄想

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
人間椅子

人間椅子

例えば、江戸川乱歩の『人間椅子』という作品は、その数多くとある作品の中でも、今なお「高い人気」を誇っているものであり、それゆえ、例えば、映画やテレビドラマなどで何度か観た経験のある人も非常に多いかと思うが、一方、本（書物）に書かれた「文章」として読む機会は、意外に少ないのではないだろうか。そこで、今回は、江戸川乱歩の『人間椅子』の「本文」にできるだけ寄り添いながら、その「魅力」を少しばかり探ってみたいと思う。

* *
まず、本文の「冒頭」は、次のようなものである。「……佳子は、毎朝、夫の登庁を見送ってしまうと、それはいつも十時を過ぎるのだが、やっと自分のからだになんて、洋館のほうの、夫と共用の書齋へ、とじこもるのが例になっていた。美しい閨秀作家としての彼女は、この頃では、外務省書記官である夫君の影を薄く思わせるほど、有名になっていた。彼女のところへは、毎日のように未知の崇拜者たちからの手紙が、幾通となく送られてきた。その多くは、極まりきったように、つまらぬ文句のものばかりであったが、彼女は、女のやさしい心遣いから、どのような手紙であろうとも、自分にあてられたもの、ともかくも、一通りは読んでみることにしていた」のである。

一、一通の手紙

さて、今日も、いつものように簡単なものから先にして、二通の封書と、一葉のはがきを見てしまうと、あとはかさ高い原稿らしい一通が残った。それは、思った通り、原稿用紙を綴じたものであった。が、どうしたことか、表題も著名もなく、突然「奥様」という、呼びかけの言葉ではじまっているのであった。……

* *
奥様、奥様のほうでは、少しも御存じのない男から、突然、このようなぶしつけなお手紙を差し上げます罪を、幾重にもお許しくださいませ。こんなことを申しあげますと、奥様は、さぞかしびっくりなさることでございませうが、私は今、あなたの前に、私の犯してきました世にも不思議な罪悪を告白しようとしているのでございます。私は数ヶ月のあいだ、全く人間界から姿を隠して、ほんとうに悪魔のような生活を続けてまいりました。もちろん、広い世界に誰一人、私の所業を知るものはありません。もし、何事もなければ、私はそのまま永久に、人間界に立ち帰ることはなかったかもしれないのでございます。ところが、近頃になりまして、私の心に或る不思議な変化が起りました。そして、どうしても、この、私の因果な身の上を、懺悔しないではいられなくなりました。ただ、かように申しましたばかりでは、いろいろ御不審におぼしめす点もございませうが、どうか、ともかくも、この手紙を終わるまでお読みくださいませ。そうすれば、なぜ、私がそんな気持ちになったのか、またなぜ、この告白を、殊さらに奥様に聞いていただかねばならぬのか、それらのことが、ことごとく明白になるでございませう。

* *
まず最初、「奥様」と親しく呼びかけている。この「奥様」という親しい呼びかけの「言、

葉」こそは、まさに実に生々しい「肉声の響き」となって、最後の最後まで、「読む人」（奥様や読者たち）の心の奥深くまで直接的に言葉が響き入るのである。しかも、いかにも「手紙の書きぶり」（つまり「自分の罪の告白文」）のように見せかけていながらも、しかし、その実は、すでに「作品（小説）の冒頭の書き出し部分」になっているという、いわば「二重構造」になっている、それは、「……どうか、ともかくも、この手紙を終わるまでお読みくださいませ。そうすれば、なぜ、私がそんな気持ちになったのか、またなぜ、この告白を、殊さらに奥様に聞いていただかねばならぬのか、それらのことが、ことごとく明白になるのでございましょう」となるのである。——つまり、ふつうに「小説の原稿」などを送っても、まともには読んでもらえないだろう。そこで、まさに「手紙形式の内容」にして送れば、最後まで読んでももらえるのではないかと、そういう「一つの試み」であるとともに、最後まで読んでもらえれば、それは、作品としては、まさに「大成功」（つまり「出来映えのよい作品」という実証にもなるということである）。

*

*

さて、私は生れつき、世にも醜い容貌の持主でございます。これをどうか、はつきりとお覚えなすっておいてくださいませ。そうでないと、もしあなたが、このぶしつけなお願いを容れて、私にお会いくださいました場合、たださえ醜い私の顔が、長い月日の不健康な生活のために、一た目と見られぬひどい姿になっているのを、なんの予備知識もなしに、あなたに見られるのは、私としては、たえがたいことでございます。

私という男は、なんと因果な生れつきなのであります。そんな醜い容貌を持ちながら、胸の中では、人知れず、世にも烈しい情熱を燃やしていたのでございます。私は、お化けのような顔をした、その上ごく貧乏な、一職人にすぎない私の現実を忘れて、身のほど知らぬ、甘美な、贅沢な、種々さまざまの「夢」にあこがれていたのでございます。

私がおもし、もつと豊かな家に生れていましたら、金銭の力によつて、いろいろの遊戯にふけり、醜貌のやるせなさを、まぎらすことができたでもありません。それともまた、私にもつと芸術的な天分が与えられていましたら、たとえば美しい詩歌によつて、この世の味気なさを忘れることができてもあります。しかし、不幸な私は、いずれの恵みにも浴することができず、哀れな、一家具職人の子として、親譲りの仕事によつて、その日その日の暮らしを立てて行くほかはないのでございました。

私の専門は、さまざまの椅子を作ることでありました。私の作った椅子は、どんなむずかしい注文主にも、きつと気に入るといので、商会でも、私には特別に目をかけて、仕事も、上物ばかりを、廻してきておりました。そんな上物になりますと、凭れや肘掛けの彫りものに、いろいろむずかしい注文があったり、クッションのぐあい、各部の寸法などに、微妙な好みがあったりして、それを造る者には、ちよつと素人の想像できないような苦心があるのでございますが、でも、苦心をすればただけ、できあがったときの嬉しさというものはありません。生意気を申すようですけれど、その心持は、芸術家が立派な作品を完成したときの喜びにも、比ぶべきものではないかと存じます。

*

*

さて、これらは、一体、何を意味するのだろうか？ それは、いわゆる『人間椅子』という「物語」（ストーリー）が成立するための、まさに「必須の条件」なのである。それは、一体、どのようなことかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、ま

ず、「……私は生れつき、世にも醜い容貌の持主でございます」とある。これは、もし「ふつうの容貌」であれば、ふつうに「恋愛」ができてしまう。それでは、わざわざ「人間椅子」など作り出す必要などどこにも生じてこないのである。しかも、「……そんな醜い容貌を持ちながら、胸の中では、人知れず、世にも烈しい情熱を燃やしたのでございませぬ」とある。これは、例えば、自分はこんな醜い容貌を持っているのだから、女性と「恋愛」などできるはずもないとあきらめているのなら、同じく「人間椅子」などを作り出す必要などどこにもないのである。ところが、「……そんな醜い容貌を持ちながら、胸の中では、人知れず、世にも烈しい情熱を燃やしたのでございませぬ」とある。それを、敢えて一言で言えば、それは、「……世にも美しい女性との恋愛を夢見ていたのです。もっと具体的に言えば、世にも美しい女性の肉体に触れてみたい、さわってみたい、もっと言えば、抱いてみたいと夢見ていた」のである。「……私がもし、もっと豊かな家に生れていましたら、金銭の力によつて、いろいろな遊戯ができただろうし、また、私にもっと芸術的な天分が与えられていましたら、たとえば美しい詩歌によつて、この世の味気なさを忘れたり、美しい女性たちを惹き付けることもでき得たでしょう。しかし、不幸な私は、いずれの恵みにも浴せず、哀れな、一家具職人の子として、（しかし、腕の優れた椅子職人として）、親譲りの仕事によつて、その日その日の暮らしを立てて行くほかはなかつたのでございます」。それゆえ、自分の「夢」を実現するためには、どうしても「人間椅子」のようなものを造り出さなければ、自分の「夢」は達成されないという、そういう「前提条件」が、ほぼ出そろつたということである。それに、幾つかの「妄想」などをつけ加えるならば、それ、次のようなものである。……

二、妄想の世界

さて、一つの椅子ができあがると、私は先ず、自分でそれに腰かけて、坐りぐあいをためてみます。そして、味気ない職人生活のうちにも、そのときばかりは、なんともいえないぬ得意を感じるのでございます。そこへは、どのような高貴の方が、或いはどのような美しい方がおかけなさることか。こんな立派な椅子を注文なさるほどのお屋敷だから、そこには、きっとこの椅子にふさわしい、贅沢な部屋があるのだろう。壁には定めし、有名な画家の油絵がかかり、天井からは、偉大な宝石のようなシャンデリヤが下がっているにちがいない。床には高価なジュウタンが敷きつめてあるだろう。そして、この椅子の前のテーブルには、眼の醒めるような西洋草花が、甘美な薫りを放って、咲き乱れていることであろう。そんな妄想に耽つていますと、なんだかこう、自分が、その立派な部屋のあるじにでもなつたような気がして、ほんの一瞬間ではありますけれど、なんとも形容のできない、愉しい気持になります。

私のはかない妄想は、なお、とめどもなく増長してまいります。この私が、貧乏な、醜い、一職人にすぎないこの私が、妄想の世界では、気高い貴公子になって、私の作つた立派な椅子に腰かけているのでございます。そして、そのかたわらには、いつも私の夢に出てくる、美しい私の恋人が、におやかにほほえみながら、私の話に聞き入っております。そればかりではありません。私は妄想の中で、その人と手をとり合つて、甘い恋の睦言を、ささやき交わしさえするのでございます。

ところが、いつの場合にも、私のこのフーワリとした紫の夢は、たちまちにして、近所のおかみさんのかましい話し声や、ヒステリーのように泣き叫ぶ、そのあたりの病児の声に妨げられて、私の前には、またしても、醜い現実が、あの灰色のむくろをさらけ出すのでございます。現実には立ち帰った私は、そこに、夢の貴公子とは似てもつかない、哀れにも醜い自分自身の姿を見出します。そして、いまの先、私にほえみかけてくれたあの美しい人は……そんなものが、全体どこにいますのでしよう。その辺に、埃まみれになつて遊んでいる、汚らしい子守女でさえ、私などには、見向いてもくれはしないのでございます。ただひとつ、私の作った椅子だけが、今の夢の名残りのように、そこにポツネンと残っております。しかし、その椅子さえも、やがて、いずことも知れぬ、私たちとは全く別の世界へ、運び去られてしまい、すべては消えてしまうのであります。

*

*

さて、彼の唯一の「自慢」は、腕の優れた椅子職人であり、彼の作った椅子は、どんなむずかしい注文主でも、きつと気に入るといので、商会でも、特別に目をかけてもらい、仕事も、上物ばかりを、廻してもらっていたのです。そして、苦心してできあがった椅子を見るときの嬉しさは、芸術家が立派な作品を完成させたときの喜びにも、比すべきものであり、そのできあがった椅子に腰掛けて夢見る「妄想」は、「……貧乏で、醜い、一職人にすぎないこの私が、妄想の世界では、気高い貴公子になって、私の作った立派な椅子に腰かけていて、しかも、そのかたわらには、いつも私の夢に出てくる、美しい私の恋人が、におやかにほえみながら、私の話に聞き入っており、しかも、そればかりではなく、私は妄想の中で、その人と手をとり合つて、甘い恋の睦言を、ささやき交わしさえするのでした」。しかし、そのような夢見る「妄想」は、現実の騒々しい音などにより、たちまちかき消され、現実には立ち帰った私は、「……そこに、夢の貴公子とは似てもつかない、哀れにも醜い自分自身の姿を見出し、しかも、先ほどまで私にほえみかけてくれたあの美しい人は……そんなものが、全体どこにいますのでしよう。その辺に、埃まみれになつて遊んでいる、汚らしい子守女でさえ、私などには、見向いてもくれないのです」。

*

*

私は、そのような「妄想」と「現実」との余りにも「大きな隔たりの間」を幾度となく彷徨ううちに、言い知れぬ味気なさに襲われるのでした。その、なんとも形容のできない、いやあな、いやあな心持は、月日がたつに従つて、だんだん、私には堪えきれないものになつてまいりました。「……こんな、うじ虫のような生活をつづけて行くくらいなら、いつそのこと、死んでしまつたほうがましだ」と、私は、まじめに、そんなことを思いました。仕事場で、コツコツと鑿を使いながら、釘を打ちながら、或いは、刺激の強い塗料をこね廻しながら、同じようなことを、執拗に考え続けるのでした。しかし、ある時、——「だが、待てよ、死んでしまうくらいなら、それほどの決心ができるなら、もっとほかに、方法がないものであろうか」と、考えるようになったのです。

そうして、私の考えは、だんだん恐ろしいほうへ、向いて行くのであります。——ちようどそのころ、私は、かつて手がけたこともない、大きな革張りの肘掛椅子の制作を頼まれておりました。その椅子は、同じY市で外人の経営している或るホテルへ納める品で、一体なら、その本国から取り寄せるはずのを、私の雇われていた商館が運動して、日本にも舶来品に劣らぬ椅子職人がいるからというので、やっと注文をとつたものでした。それ

だけに、私としても、寝食を忘れてその制作に従事しました。ほんとうに魂をこめて、四つの肘掛椅子を、夢中になって創り上げ、その中の一つを徹底的に改造して、一人の人間が中に入れるような、まさに「人間椅子」へと仕上げたのでございます。

三、人間椅子の完成

それでは、その「動機と作り方」であるが、それをここで再確認しておきたいと思うが、それは、次のようなものである。つまり、「……最初は、ただただ、私の丹精こめた美しい椅子を、手放したくない、できることなら、その椅子と一緒に、どこまでもついでに行きたい、そんな単純な願いでした。それが、うつらうつらと妄想の翼を広げているうちに、ふとすばらしい考えが浮かんでまいりました。悪魔の囁きというのは、多分ああしたことを指すのではありますまいか、それは、夢のように荒唐無稽で、不気味な事柄でした。でも、その不気味さが、言いしれぬ魅力となつて、私をそのかすのでございます。そして、私はまあなんといい気がいってございましょう、その奇怪きわまる妄想を、実際にやってみようと思ひ立ったのであります。私は大急ぎで、四つの内でいちばんよくできたと思ふ肘掛椅子を、バラバラに毀してしまい、改めて、それを私の妙な計画を実行するのに、都合のよいように造り直しました。

それは、ごく大型のアームチェアですから、掛ける部分は、床にすれすれまで革を張りつめてあり、そのほか、凭れも肘掛けも、非常に部厚にできていて、その内部には、人間一人が隠れていても、決して外からわからないほどの、共通した大きな空洞があり、むしろん、そこには頑丈な木の枠と、沢山なスプリングが取りつけてあるが、私はそれらに適当な細工をほどこして、人間が掛ける部分に膝を入れ、凭れの中へ首と胴を入れ、ちょうど椅子の形に坐れば、その中にしのんでいられるほどの余裕を作ったのです。——そして、例えば、呼吸をしたり、外部の物音を聞くために、革の一部に、外から少しもわからぬような隙間をこしらえたり、凭れの内部の、ちょうど頭のわきの所へ、小さな棚をつけて、何かを貯蔵できるようにし、そこに水筒と軍隊用の乾パンとを詰めこみ、その他、様々な考案をめぐらして、食料さえあれば、その中に二日三日入り続けていても、決して不便を感じない、いわば、その椅子が、人間一人の部屋になつたのでございます。

さて、すべての「準備」ができ上がると、あとは、「……私はシャツ一枚になり、底に仕掛けた出入口の蓋をあけて、椅子の中へ、すっぽりともぐりこみました。それは実に変てこな気持であり、まっ暗な、息苦しい、まるで墓場の中へはいったような、不思議な感じがしましたが、考えてみれば、墓場にちがいありません。私は、椅子の中へはいると同時に、ちょうど隠れ蓑でも着たように、人間世界からは消滅してしまうのですから。

やがて、商会から使いのものが、四脚の肘掛椅子を受け取るために、大きな荷車を持ってやってまいりました。私の内弟子が（私はその男と、たった二人暮らしたのですが）、何も知らないで、使いのものと対応しております。車に積みこむ時、一人の人夫が『こいつはばかに重いぞ』とどなりましたが、もともと肘掛椅子そのものが非常に重いものですから、別段あやしまれることもなく、結局、何事もなく、その日の午後には、もう私の

いった肘掛椅子は、ホテルの一室に、どっかりと据えられておりました。それは、私室ではなくて、人を待ち合わせたり、新聞を読んだり、煙草をふかしたり、いろいろの人の頻繁に出入りする、ラウンジとでもいうような部屋でございました。……

四、奇っ怪な快樂

さて、ホテルのラウンジに、人間の入った肘掛椅子が、どっかりと据えられると、彼がまず最初に行なったことは、何と「盗み」であり、人のいない時を見すまして、椅子の中から抜け出し、ホテルの中をうろつき廻って、盗みを働くことであり、椅子の中に人間が隠れていようななどと、そんなばかばかしいことを、誰が想像いたしましたでしょう。私は、影のように、自由自在に、部屋から部屋を荒らし廻ることができ、そして、人々が騒ぎはじめる時分には、椅子の中の隠れ家へ逃げ帰って、息をひそめて、彼等の間抜けな搜索を見物していればよいのです。そして、ホテルに着いて三日目には、もうたんまりと、ひと仕事すませていたほどであり、いざ盗みをするという時の恐ろしくも楽しい心持、うまく成功した時の、なんとも形容しがたい嬉しさ、それから、人々が私のすぐ鼻の先で、あっちへ逃げた、こっちへ逃げたと、大騒ぎをやっているのを、じっと見ているおかしさ、それがまあ、どのような不思議な魅力をもつて、私を楽しませたことでもございました。

*

*

しかし、今の私は、そんな盗みなどよりは、十倍も、二十倍も、私を喜ばせたところの、奇怪きわまる快樂を発見したのでございます。そして、それについて、告白することが、実は、この手紙の本当の目的なのでございます。——さて、いろいろな人たちが入れかわり立ちかわり腰をおろしますが、彼らが柔かいクッションだと信じきっているものが、実は私という人間の、血の通った大腿であるということは、少しも悟られなかったのでございます。——まっ暗で、身動きもできない革張りの中の天地、それがまあどれほど、怪しくも魅力ある世界でございませよ。そこでは、人間というものが、日頃目で見ている、あの人間とは、全然別な生きものに感ぜられます。彼らは声と、鼻息と、足音と、衣ずれの音と、そして、幾つかの丸々とした弾力に富む肉塊にすぎないのでございます。私は、彼らのひとりひとりを、その容貌のかわりに、肌ざわりによって識別することができます。

それは、異性についても、同じことであり、普通の場合は、主として容貌の美醜によって、それを批判するのですが、この椅子の中の世界では、そんなものは、まるで問題外であり、そこには、まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりであり、私はその中で、一人の女性の肉体に（それは私の椅子に腰かけた最初の女性でしたが）烈しい愛着を覚えたのでございます。声によって判断すれば、それは、まだうら若い異国の乙女であり、彼女は、何か嬉しいことでもあった様子で、小声で、不思議な歌を歌いながら、踊るような足どりで、そこへはいつてきて、私のひそんでいる肘掛椅子の前までくると、いきなり、豊満な、それでいて非常に、しなやかな肉体を、私の上へ投げかけました。しかも、彼女は何かおかしのか、突然アハアハ笑い出し、手足をバタバタさせて、網の中の魚のように、ピチピチと跳ね廻るのでございます。

女は神聖なもの、いや、むしろ怖いものとして、顔を見ることさえ遠慮していた私でございませ。その私が今、身も知らぬ異国の乙女と、同じ部屋に、同じ椅子に、それどころ

ではありません、薄いなめし皮ひとつ隔てて、肌のぬくみを感じるほど密着しているの
でございます。それにもかかわらず、彼女は何の不安もなく、全身の重みを私の上に委ね
て、見る人のない気安さに、勝手気儘な姿勢をいたしております。私は椅子の中で、彼女
を抱きしめる真似をすることもできます。革のうしろから、その豊かな首筋に接吻するこ
ともできます。そのほか、どんなことをしようと、自由自在なのでございます。

この驚くべき発見をしてからというものは、私は、最初の目的であった盗みなどは第二
として、ただもう、その不思議な感触の世界に惑溺してしまつたのでございます。私は考
えました。これこそ、この椅子の中の世界こそ、私に与えられた、ほんとうのすみかでは
ないかと。私のような醜い、そして気の弱い男は、明るい光明の世界では、いつもひけ目
を感じながら、恥かしい、みじめな生活を続けて行くほかに、能のない身でございませ
それが、ひとたび、住む世界をかえて、こうして椅子の中で、窮屈な辛抱をしていさえす
れば、明るい世界では、口を利くことはもちろん、そばへよることさえ許されなかつた、
美しい人に接近して、その声を聞き、肌に触れることもできるのでございます。

椅子の中の恋！ それがまあ、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つか、実際に椅
子の中にはいつてみた人でなくては、わかるものではありません。それは、ただ、聴覚と、
聴覚と、そして僅かの嗅覚のみの恋でございませぬ。暗やみの世界の恋でございませぬ。決
してこの世のものではありません。これこそ、悪魔の国の愛欲なのでございませぬまいか。
考えてみれば、この世界の、人目につかぬすみずみでは、どのような異形な、恐ろしい事
柄が行なわれているか、ほんとうに想像のほかでございませぬ。

*

*

さて、主人公の家具「職人」は、最初は、人のいない時を見すまして、椅子の中から抜
け出し、ホテルの中をうろつき廻つては、何と「盗み」を働くことに夢中になつていたの
である。むろん、その「目的」は、「金品」を得ることではあるが、それに加えて、「…
：いざ盗みをするという時の恐ろしくも楽しい心持、また、うまく成功した時の、なんと
も形容しがたい嬉しさ、それから、人々が私のすぐ鼻の先で、あっちへ逃げた、こっちへ逃
げたと、大騒ぎをやつてゐるのを、じつと見てゐるおかしさ、それがまあ、どのような不
思議な魅力をもつて、私を楽しませたことと、今と今と、その「得意」を感じて
いたのである。——ところが、「…：今の私は、そんな盗みなどよりは、十倍も、二十倍
も、私を喜ばせたところの、奇怪きわまる快楽を発見したのでございませぬ。そして、それ
について、告白することが、実は、この手紙の本当の目的なのでございませぬ」となるので
ある。——では、それは、一体、どのようなことであるのかと問えば、それは、まさに次
のようなことになるのである。

例えば、女性に対しては、「…：一般に、主として容貌の美醜によつて、それを批判す
るのでしようが、この椅子の中の世界では、そんなものは、まるで問題外であり、そこに
は、まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりであり、私はそこで、一人の
女性の肉体に（それは私の椅子に腰かけた最初の女性でしたが）烈しい愛着を覚えたので
ございませぬ」とある。——それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、彼の人生の中で、
かつて一度も経験したことのないようなことを、初めて生で経験していたからである。つ
まり、彼は、世にも醜い容貌だったので、まともに女性に近づくことすらできず、まして
や、女性の「肉体」に直接触れるようなことは全くなかつたのである。

ところが、それは、「椅子の中」からではあったが、彼は、一人の女性の肉體、「……それは、声によって判断すれば、まだうら若い異国の乙女であったが、彼女は、何か嬉しいことでもあった様子で、小声で、不思議な歌を歌いながら、踊るような足どりで、そこへはいつてきて、私のひそんでいる肘掛椅子の前までくると、いきなり、豊富な、それでいて非常に、しなやかな肉體を、私の上へ投げかけました。しかも、彼女は何かおかしいのか、突然アハアハ笑い出し、手足をバタバタさせて、網の中の魚のように、ピチピチと跳ね廻るのでございます。——女は神聖なもの、いや、むしろ怖いものとして、顔を見ることさえ遠慮していた私でございます。その私が今、身も知らぬ異国の乙女と、同じ部屋に、同じ椅子に、それどころではありません、薄いなめし皮ひとつ隔てて、肌のぬくみを感じるほど密着しているのでございます。それにもかかわらず、彼女は何の不安もなく、全身の重みを私の上に委ねて、見る人のない気安さに、勝手気儘な姿勢をいたしております。私は椅子の中で、彼女を抱きしめる真似をすることもできます。革のうしろから、その豊かな首筋に接吻することもできます。そのほか、どんなことをしようと、自由自在なのでございます」という、彼の人生の中で、かつて一度も経験したことのないようなことを、今、まさに初めて生で経験していることになるのである。……

そして、「……この驚くべき発見をしてからというものは、私は、最初の目的であった盗みなどは第二として、ただもう、その不思議な感觸の世界に感溺（我を忘れ夢中になつて）しまったのです。私は考えました。これこそ、この椅子の中の世界こそ、私に与えられた、ほんとうのすみかではないかと。私のような醜い、そして気の弱い男は、明るい光明の世界では、いつもひげ目を感じながら、恥かしい、みじめな生活を続けて行くほかに、能のない身でございます。それが、ひとたび、住む世界をかえて、こうして椅子の中で、窮屈な辛抱をしていさえすれば、明るい世界では、口を利くことはもちろん、そばへよることさえ許されなかった、美しい人に接近して、その声を聞き、肌に触れることもできるのでございます。——椅子の中の恋！それがまあ、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つか、実際に椅子の中にはいつてみた人でなくては、わかるものではありません。それは、ただ、觸覚と、聴覚と、そして僅かの嗅覚のみの恋でございます。暗やみの世界の恋でございます。決してこの世のものではありません。これこそ、悪魔の国の愛欲なのではございますまいか。考えてみれば、この世界の、人目につかぬすみずみでは、どのような異形な、恐ろしい事柄が行なわれているか、ほんとうに想像のほかでございます」となるのである。——つまり、考えてみれば、この「椅子の中の恋！」どころではない、この「俗世界」（その実に様々な「欲望や感情」その他などが生々しく蠢いているこの「俗世界」）の、人目につかぬすみずみでは、一体、どのような「異形な恐ろしい事柄」（それは「想像すら出来ない、ような異様な恐ろしいこと」）が行なわれているか、分かったものではない、ということである。

五、新しい経験

むろん、はじめの予定では、盗みの目的を果たしたならば、すぐにもホテルを逃げ出すつもりでいたのですが、この世にも奇怪な喜びに夢中になった私は、逃げ出すどころか、いつまでも椅子の中を永住のすみかにして、その生活を続けていたのでございます。

夜々の外出には、注意に注意を加えて、少しも物音を立てず、また人目に触れないようにしてしまいましたので、当然、危険はありませんでしたが、それにしても、数ヶ月という長い月日を、そうして少しも見つかからず、椅子の中に暮らしていたというのは、我ながら実に驚くべきことでした。——ほとんど一日じゅう、ひどく窮屈な場所で、腕を曲げ、膝を折っているためからだじゅうが痺れたようになって、完全に直立することができず、しまいには、料理場や化粧室の往来を、壁（足が不自由で立てない人）のように這って行ったほどでございます。私という男は、なんと気がいでありました。それほど苦しみを忍んでも、不思議な感觸の世界を見捨てる気にはなれなかつたのでございます。もちろん、ホテルのことですから、絶えず客の出入りがあります。そして、女から女へと移って行くあいだに、私はまた、それとは別な、不思議な経験を味わいました。

その一つは、ある時、欧州の或る強国の大使が、その偉大な体軀を、私の膝の上のせたことであり、それは、政治家としてよりも、世界的な詩人として、いつそうよく知られていた人ですが、私は、その偉人の肌を知ったことが、わくわくするほど誇らしく思われたのでございます。——一方、その時、私はふとこんな事を想像しました。もし、この革のうしろから、鋭いナイフで、彼の心臓を目がけて、ぐさりとひと突きしたなら、どんな結果を惹き起こすであろう。彼の本国はもとより、日本の政界では、そのために、どんな大騒ぎを演じることだろう。そんな大事件が、自分の一挙手によって、やすやすと現実に行けるのだ。それを思うと、私は不思議な得意を感じないではいられませんでした。

そして、もう一つは、有名な或る国のダンサーが来日した時、偶然、彼女がそのホテルに宿泊して、たった一度であります。私の椅子に腰かけたことでございます。その時、私は、大使の場合と似た感觸を受けましたが、それ以上に、彼女は、私にかつて経験したことのない理想的な「肉体美」の感觸を与えてくれました。私は、そのあまりの美しさに、卑しい考えなどは起こす暇もなく、ただもう芸術品に対する時のような敬虔な気持ちで、彼女を賛美したのでございます。……

*

*

さて、主人公の「椅子の中」での「生活ぶり」は、一体、どのようなものであったのかと問えば、それは、次のようなものであったらしい。つまり、「……むろん、はじめの予定では、盗みの目的を果たしたら、すぐにもホテルを逃げ出すつもりでしたが、この世にも奇怪な喜びに夢中になった私は、逃げ出すどころか、いつまでも椅子の中を永住のすみかにして、その生活を続けていた」のです。——そして、夜々の外出には、注意に注意を加えて、少しも物音を立てず、また人目に触れないようにしていたので、当然、危険はありませんでしたが、それにしても、数ヶ月という長い月日を、そうして少しも見つかからず、椅子の中に暮らしていたというのは、我ながら実に驚くべきことでした。——それは、ほとんど一日中、ひどく窮屈な場所で、腕を曲げ、膝を折っているために、からだ中が痺れたようになって、完全に直立することができず、しまいには、料理場や化粧室の往来を、壁のように這って行ったほどです。私という男は、なんと気がいでありました。それほど苦しみを忍んでも、不思議な感觸の世界を見捨てる気にはなれなかつたのです。

もちろん、ホテルのことですから、絶えず客の出入りがあり、そして、女から女へと移って行くあいだに、私はまた、それとは別な、不思議な経験を味わいましたというところで、一つは、世界的にも有名な詩人の「偉人の肌」を知ったことが、わくわくするほど誇らし

く思われたり、また、一方、もし、この革かわのうしろから、鋭いナイフで彼の心臓を目掛けて、ぐざりとひと突きしたなら、一体、どんな結果を惹き起こすだろうかと思像してみた。また、或る国の有名なダンサーが来日した時には、その彼女の、かつて経験したこともないような理想的な「肉体美」の感触にふれて、そのあまりの美しさに、卑しい考えなどは少しも起こらず、ただもう芸術品に対するような敬虔けいけんな気持で、彼女を賛美さんびしたことを挙げてゐる。——これらは、話の「内容」が一本調子の狭いものにならないように、話にいろいろ具体的な「経験談」などを書き加えて現実味げんじつみを醸し出しながら、いよいよ本題へと入っていくのである。

六、新たな展開

さて、私がホテルへ参りましてから、何ヶ月かの後、私の身の上にひとつの変化が起りました。と言うのも、ホテルの経営者が、何かの都合で帰国することになり、あとは、ある日本人の会社に譲り渡したのであります。そして、従来の贅沢な営業方針を改めて、もっと一般向きの旅館として、有利な経営を目標もくろむことになり、そのため不要になった調度などは、競売にかけることになり、その競売目録のなかに、私の椅子も加わっていたのでございます。——そして、競売が始まると、仕合わせなことには、私の椅子は早速買手が見つきました。買手は、Y市から程遠ほどからぬ、大都会に住んでいた或る官吏りでありました。買手のお役人は、可なり立派な屋敷の持ち主で、私の椅子は、その洋館の広い書齋しやさいに置かれたが、わたしにとって非常な満足であったことは、その書齋は、主人よりも、むしろその家の若くて美しい夫人が使用されるものだったのでございます。それ以来、約一ヶ月間、私は絶えず、夫人とともにおりました。婦人の食事と、就寝の時間を除いては、婦人のしなやかなからだは、いつも私の上にあります。それというのも、夫人は、その間、書齋しやさいにつめきつて、ある著作しやくに没頭ぼつとうしておられたからでございます。……

* * *

さて、話ストーリー(物語)は、いよいよ「本題」へと向かうが、そのためには、次のような劇的な「変化」(つまり「私の身の上に一つの大きな変化」)が起こることが、どうしても必要不可欠であり、それは、ホテルの経営者が本国へと帰国して、日本人の経営者に代わると、「……従来の贅沢な営業方針を改めて、もっと一般向きの旅館として、有利な経営を目標もくろむようになり、そのため不要になった調度などは、競売にかけることになるが、その競売目録のなかに、私の椅子は早速買手が見つかることになる」が、その「買手」こそは、仕合わせなことには、私の椅子は早速買手が見つかることになる」が、その「買手」こそは、まさに「……Y市から程遠ほどからぬ、大都会に住んでいた或る官吏りであり、その買手のお役人は、可なり立派な屋敷の持ち主であり、私の椅子は、その洋館の広い書齋しやさいに置かれることになる」とともに、さらに劇的なことは、「……わたしにとって非常な満足であったことは、その書齋は、主人よりも、むしろその家の若くて美しい夫人が使用されるものだった」のである。そして、「……それ以来、約一ヶ月間、私は絶えず、夫人とともにおりましたが、それというのも、夫人は、その間、書齋しやさいにつめきつて、ある著作しやく(それは『K雑誌のこの夏の増大号に載せるための長い創作』)に没頭ぼつとうしていたからである」という展開けんになっていくのである。

さて、いよいよ「女主人公」（美しい閨秀作家佳子）の登場であるが、夫人は、約一ヶ月間、書齋につめきって、ある「著作」（それは「K雑誌のこの夏の増大号に載せるための長い創作」）に没頭していたが、一方、「椅子の中」の主人公の家具職人も、同じように、「……それ以来、約一ヶ月間、私は絶えず、夫人とともにおりました。それは、婦人の食事と、就寝の時間を除いては、婦人のしなやかなからだは、いつも私の上にあり、ました」とともに、次のような過激な「展開」（告白）へと連なっていくのである。

*

*

さて、私は彼女をどれほど愛したか。彼女は、私のはじめて接した日本人であり、しかも、充分美しい肉体の持ち主でした。私は、そこにはじめて、ほんとうの恋を感じたのです。それに比べれば、ホテルでの、数多い経験などは、決して恋と名づくべきものではないかもしれません。その証拠には、これまで一度も、そんなことを感じなかったのに、その夫人に對してだけ、私は、ただ秘密の愛撫を楽しむのみではあきたらず、どうかして、私の存在を知らせようと、いろいろ苦心したのでも明らかなことです。

私は、できるならば、夫人のほうでも、椅子の中の私を意識してほしかったのでございます。そして、虫のいい話ですが、私を愛してもらいたく思ったのでございます。……でも、それをどうして合図いたしましたでしょう。もし、そこに人間が隠れているということを、あからさまに知らせたなら、彼女はきっと驚きのあまり、主人や家のものに、そのことを告げるに違いありません。それではすべて駄目になってしまうばかりか、私は、恐ろしい罪名を着て、法律上の刑罰さえ受けなければなりません。

そこで、私は、せめて夫人に、私の椅子を、この上にも居心地よく感じさせ、それに愛着を起させようと努めたのです。芸術家である彼女は、きつと常人以上の微妙な感覚を備えているにちがひありません。もし彼女が、私の椅子に生命を感じてくれたなら、ただの物質としてではなく、ひとつの生きものとして愛着を覚えてくれたなら、それだけでも、私は充分満足なのでございます。

私は、彼女が私の上に身を投げた時には、できるだけフワリと優しく受けるように心掛けました。彼女が私の上で疲れた時分には、わからぬほどにソロソロと膝を動かして、彼女のからだの位置を変えるようにいたしました。そして、彼女が、ウトウトと居眠りをはじめるとなると、私は、ごくごく幽かに膝をゆすって、揺籃のような役目を勤めたのでございます。

この心遣りが報いられたのか、それとも、単に私の気の迷いか、近頃では、夫人は、なんとなく私の椅子を愛しているように思われます。彼女は、ちょうど嬰兒が母親の懐に抱かれるときのような、または、乙女が恋人の抱擁に応じるときのような、甘い優しさをもって私の椅子に身を沈めます。そして、私の膝の上で、からだを動かす様子までが、さも懐かしげに見えるのでございます。

かようにして、私の情熱は、日々に烈しく燃えて行くのでした。そして、ついには、アア、奥様、ついには、私は身のほどもわきまえぬ、大それた願いを抱くようになったのでございます。たったひと目、私の恋人の顔を見て、そして、言葉を交わすことができたなら、そのまま死んでもよいとまで、思いつめたのでございます。

奥様、あなたは、むろん、とつくにお悟りでございましょう。その私の恋人と申しますのは、実は、あなた様なのでございます。あなたの御主人が、Y市の道具店で、私の椅子

をお買いになつて以来、私はあなたに及ばぬ恋をささげていた、哀れな男でございます。奥様、一生のお願いでございます。たった一度、私にお逢いくださるわけにはまいらぬでしょうか。そして、ひとことでも、この哀れな醜い男に、慰めのお言葉をおかけくださるわけにはまいらぬでしょうか。——私は決してそれ以上を望むものではありません。そんなことを望むにはあまりに醜く、また、汚れ果てた私でございます。どうぞ、どうぞ、世にも不幸な男の、切なる願いをお聞き届けくださいませ。……

そして、いま、あなたがこの手紙をお読みなさる時分には、私は心配のために青い顔をして、お邸のまわりを、うろつき廻つております。

もし、この世にもぶしつけな願いを聞き届けくださいますなら、どうか書斎の窓の撫子の鉢植えに、あなたのハンカチをおかけくださいまし。それを合図に、私は、何気なく一人の訪問者として、お邸の玄関を訪れるでございますよう。

そして、この不思議な手紙は、ある熱烈な祈りの言葉をもつて結ばれていた。

*

*

さて、長い引用になつたが、しかし、ここは主人公（家具「職人」の「心の高揚」（高まり）の「クライマックス」部分であり、それゆえ、ここは切らずに、一気に読み進むことが何よりも大事なことになるのである。——まず、主人公は、「……私は彼女をどれほど愛したか」と言っている。その「理由」としては、「……今まではすべて異国人の異性であり、たとえ、それがどんな立派な、好ましい肉体の持ち主であっても、精神的な妙なもの足りなさを感じていて、やはり、日本人は同じ日本人に対してでなければ、ほんとうの恋を感じることはできないのではないかと思つていた」ので、今度は、まさに「……彼女は、私のはじめて接した日本人であり、しかも、充分美しい肉体の持ち主でした。私は、そこにはじめて、ほんとうの恋を感じたのです。それに比べれば、ホテルでの数多い経験などは、決して恋と名づくべきものではございません。その証拠には、これまで一度も、そんなことを感じなかったのに、その夫人に対してだけ、私は、ただ秘密の愛撫を楽しむのみでは飽き足らず、どうかして、私の存在を知らせようと、いろいろ苦心したのでも明らかなことです」とある。——しかし、自分の「存在を知られる」ことは、この主人公にとっては、本来、まさに「禁忌」なはずであるが、それは、「……もし、そこに人間が隠れているということ、あからさまに知らせたなら、彼女はきっと驚きのあまり、主人や家のものに、そのことを告げるに違いありません。それではすべて駄目になってしまうばかりか、私は、恐ろしい罪名を着て、法律上の刑罰さえ受けなければならぬ」からであり、また、もともと自分の醜い「容貌」を見られることも望んではいないのである。

そこで、最初は、「……せめて夫人に、私の椅子を、この上にも居心地よく感じさせ、それに愛着を起させようと努めたのです。芸術家である彼女は、きっと常人以上の微妙な感覚を備えているに違いありません。もし彼女が、私の椅子に生命を感じてくれたなら、ただの物質としてではなく、ひとつの生きものとして愛着を覚えてくれたなら、それだけでも、私は充分満足である」とともに、その実践として、「……私は、彼女が私の上に身を投げた時には、できるだけフワリと優しく受けるように心掛けました。彼女が私の上で疲れた時分には、わからぬほどにソロソロと膝を動かして、彼女のからだの位置を変えよういたしました。そして、彼女が、ウトウトと居眠りをはじめるとな場合には、私は、ごくごく幽かに膝をゆすつて、揺籃のような役目を勤めた」のである。

その結果、「……その心遣りが報いられたのか、それとも、単に私の気の迷いか、近頃では、夫人は、何となく私の椅子を愛しているように思われます。彼女は、ちょうど嬰兒が母親の懐に抱かれるときのような、または、乙女が恋人の抱擁に応じるときのような、甘い優しさをもって私の椅子に身を沈めます。そして、私の膝の上で、からだを動かす様子までが、さも懐かしげに見えるのです」と、その「手応え」を感じているのです。

かようにして、「……私の情熱は、日々に烈しく燃えて行くのでした。そして、ついには、アア、奥様、ついには、私は身のほどもわきまえぬ、大それた願いを抱くようになったのでございます。たつたひと目、私の恋人の顔を見て、そして、言葉をお交わすことができたなら、そのまま死んでもよいとまで、思いつめたのでございます。——奥様、あなたは、むしろ、とっくにお悟りでございましょう。その私の恋人と申しますのは、実は、あなた様なのでございます。あなたの御主人が、Y市の道具店で、私の椅子をお買いになつて以来、私はあなたに及ばぬ恋をささげていた、哀れな男でございませぬ。——奥様、一生のお願いでございます。たつた一度、私にお逢いくださいさるわけにはまいらぬでしょうか。そして、ひとことでも、この哀れな醜い男に、慰めのお言葉をおかけくださいさるわけにはまいらぬでしょうか。——私は決してそれ以上を望むものではありません。そんなことを望むにはあまりに醜く、また、汚果てた私でございませぬ。どうぞ、世にも不幸な男の、切なる願いをお聞き届けくださいませ」と言うのであった。

これは、まさに「主人公」(家具「職人」)の「心の高揚」(高まり)の「クライマックス」部分であるが、それを敢えて一言で言えば、それは、ただもうひたすら「奥さんに会いたい、会って話したい」という「一念」であり、そして、「……もし、この世にもぶしつけな願いを聞き届けくださいますなら、どうか書斎の窓の撫子の鉢植えに、あなたのハンカチをおかけくださいまし。それを合図に、私は、何気なく一人の訪問者として、お邸の玄関を訪れるでございませぬ」となつて行くのである。

七、奥様の反応

佳子は、手紙の半ばほどまで読んだとき、すでに恐ろしい予感のために、まっ青になつてしまった。そして、無意識に立ち上がると、気味のわるい肘掛椅子の置かれた書斎から逃げ出して、日本建ての居間のほうへ来ていた。手紙のあとのほうは、いっそ読まないで破り棄ててしまおうかと思つたけれど、どうやら気掛りなままに、居間の小机の上で、ともかくも、読み続けた。——彼女の子感はやつぱり当たつていた。

これはまあ、なんとという恐ろしい事実であろう。彼女が毎日腰かけていたあの肘掛椅子の中には、見も知らぬ一人の男がはいつていたとは。——「おお、気味のわるい」、彼女は、背中から冷水をあびせられたような悪寒を覚えた。そして、いつまでたつても、不思議な身震いがやまなかつたのです。彼女は、あまりのことに、ボンヤリしてしまつて、これをどう処置すべきか、まるで見当がつかなくなつたのであります。その時……

*

*

「奥様お手紙でございます」と、一人の女中が、いま届いたらしい封書を持ってきたのである。佳子は、ハツとして、振り向くと、無意識にそれを受け取つて、開封しようとした時に、思わずその手紙を取り落したほどに、ひどい驚きに打たれたのでした。それは、

さっきの無気味な手紙と寸違わぬ筆癖をもって、彼女の宛名が書かれてあったからである。彼女は、長いあいだ、それをどうしようかと迷っていたが、とうとう最後にそれを破って、ビクビクしながら中身を読んだ行った。手紙はごく短いものであったが、そこには、彼女を、もう一度、ハッとさせるような、奇妙な文句が記されてあった。……

*

*

突然御手紙を差し上げますぶしつけを、幾重にもお許しくださいまし。私は日頃、先生のお作を愛読しているものでございます。別封お送りいたしましたのは、私の拙い創作でございます。御一覽の上、御批判がいただけますれば、この上の幸いはいけません。或る理由のために、原稿のほうは、この手紙を書きます前に投函いたしましたから、すでにごらんずみかと拝察いたします。如何でございましたでしょうか。もし拙作がいくらかでも、先生に感銘を与え得たとしますれば、こんな嬉しいことはないでございますが。

原稿には、わざと省いておきましたが、表題は「人間椅子」とつけたい考えでございます。では、失礼を顧みず、お願いまで。……(完)

八、更なる妄想

さて、江戸川乱歩の『人間椅子』という「作品」(本文)は、ここで「完結」しているのである。そして、「……私は生れつき、世にも醜い容貌の持主であること、また、椅子職人としてはすぐれた腕も持ち、その出来上がった椅子に腰掛けながら、色々な『妄想』に耽っているうちに、世にも奇つ怪な人間椅子を創り出した」というような内容は、すべて「創作」(フイクション)であり、それゆえ、この『人間椅子』を書いた作者というのは、日頃から、先生の作品を愛読している一ファンであるとともに、自分もできれば作家になろうとして、その「原稿」を先生に送って、読んでもらい、その読んだ後の先生の「感想」(或いは「批評」)がぜひとも聞きたいということである。——それは、本文の中にも、「……いま、あなたがこの手紙をお読みなさる時分には、私は心配のために青い顔をして、お邸のまわりを、うろつき廻っております。もし、この世にもぶしつけな願い(それは「一度だけでも逢ってほしい」という願い)を聞き届けくださいますなら、どうか書齋の窓の撫子の鉢植えに、あなたのハンカチをおかけくださいまし。それを合図に、私は、何気なく一人の訪問者として、お邸の玄関を訪れるでございましょう」となるのである。

そこで、奥様は、書齋に戻り、なにげなく窓の下の方を見た時に、そこに、なんと一人の男性、しかも、(貴公子のような)、若くてハンサムでたくましい男性の姿が「上の方」(奥様の方)をじつと見ていて、二人の「眼と眼」は自然とふれ合い、お互いに見つめ合うような状態となり、一方の男性は、「なんて美しい人なのだろう」と思い、そして、もう一方の奥様の方も、「えっ! なんてハンサムな人なんだろう」と思ったとしたら、一体、どうなるのだろうか? 奥様は、何とも不思議な想いに深く襲われて、あれこれ迷いながらも、何か大きな力に導かれるように、玄関へとおそるおそる降りて行き、そして、ついにはドアを開けてしまい、二人は、直接、出逢うことになってしまうのだろうか? もしドアを開けなければ、話はここですべては終わりであり、一方、もしドアを開けるならば、二人は恐らく、恋に深く落ちてしまう可能性は高いのだろう。なぜなら、作者である男性は、言うまでもなく、奥様にはっきりと「恋心」を抱いているのであり、一方、奥

様は、その手紙（作品）を読むことで、その「告白」をはっきりと聞いているからである。そして、若しも二人が恋に深く落ちていくとすれば、その作者の「妄想」は、まさに「現実のもの」となり、それは、「……世にも美しい女性（奥様）」との恋愛を夢見ていたのである。それをもっと具体的に言えば、世にも美しい女性（奥様）の肉体に触れてみたい、さわってみたい、もっと言えば、抱いてみたいと夢見ていた」のである。その「夢」（妄想）は、今、まさに「現実のもの」となっていくのである。——それは、木と革とで出来た「人間椅子」からの妄想的な間接的な「触れ合い」（愛撫）などではなく、むしろ生身の人間で出来た生々しい「人間椅子」からの、まさに直接的な「触れ合い」（愛撫）へと変わっていくのである……。

*

*

「参考文献」

- ※底本 「人間椅子」 江戸川乱歩著（青空文庫）
- ※底本 「江戸川乱歩傑作集」 江戸川乱歩著（新潮文庫）